

## いつまでもなくなる食べ物

ヨハネの福音書 6章 22-33節

### はじめに

ヨハネの福音書の6章は、イエス様が五つのパンと二匹の魚を用いて、五千人以上の群衆のお腹を満腹にしたという出来事から始まりました。この出来事を見た群衆は、「**まことにこの方こそ、世に来られる預言者だ**」(6:14)と言って、イエス様を自分たちの「王」にするために連れて行こうとしました。しかしイエス様は、群衆から逃げるように、ただ一人山に退かれたのです(6:15)。

イエス様が山に退かれています間、弟子たちは舟で「カペナウム」の方に渡って行きました。するとイエス様が湖の上を歩いて来られ、弟子たちの舟に乗り込まれたのです(6:16-21)。

今日の聖書箇所は、「**その翌日**」の出来事です。つまりイエス様がパンを増やし、湖の上を歩かれた翌日の出来事です。群衆は、イエス様を捜していました。群衆は、弟子たちだけで舟に乗って、カペナウムに行く姿を見ていました。そうであるならば、イエス様はまだ山にいるに違いないと思っていました。ところが、山をいくら捜してもイエス様はおられないのです。彼らは、イエス様が真夜中に、湖の上を歩いて弟子たちの舟に合流したことを知らないのです。イエス様がどこにもいないことに気づいた群衆は、自分たちも舟に乗って、カペナウムに向かうのです。するとカペナウムでようやくイエス様を見つけ出すのです。そしてイエス様を見つけると、彼らはこう言います。「**先生、いつここにおいでになったのですか**」。群衆は、不思議でならなかったのです。イエス様がどうやってカペナウムまで来たのかが、まるで分らなかったのです。まさかイエス様が、真夜中に湖の上を歩いて来られたとは、思いもよらなかったのです。

いずれにしても群衆は、イエス様を捜しまわったのです。イエス様がいる所なら、どこにでもついて行ったのです。

### 1. しるしを見ない群衆

では、群衆はなぜイエス様を捜しまわったのでしょうか。26-27節でイエス様はこう言われます。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくなる、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の子が与える食べ物です。この人の子に、神である父が証印を押されたのです**」。

イエス様は、群衆がイエス様を捜しまわっているのは、しるしを見たからではなく、パ

ンを食べて満腹したからだと言われます。ヨハネの福音書では、イエス様の奇跡は「しるし」と呼ばれます。イエス様の奇跡は、ただ単に人々を驚かせるためではなく、何かの霊的な真理を証しているのです。しかし群衆は、イエス様の奇跡から「しるし」を読み取らなかったのです。イエス様の奇跡に込められている霊的な真理を読み取らなかったのです。ただ単に、五つのパンと二匹の魚が増えて、お腹が一杯になった、そのことだけを見ているのです。

では、パンの奇蹟は、いったいどのような霊的な真理を証しているのでしょうか。それは、イエス様こそ、「いつまでもなくなる、永遠のいのちに至る食べ物」を与える方であるという霊的な真理です。それを群衆に証しするために、パンの奇蹟を行われたのです。パンをいくら配ってもなくなり、十二のかごにいっぱいであり余るほど与えられたように、イエス様は私たちに、いつまでもなくなる霊的な「いのち」を十分に与えてくださる方である、つまり永遠のいのちを与える方であることを、あの奇蹟を通して証しされたのです。イエス様は群衆に、その「しるし」を、その霊的な真理を読み取ることを期待されたのです。

しかし群衆は、あの奇蹟から、「パンを食べて満腹した」という表面的なことしか読み取ることができなかったのです。彼らはイエス様を必死に捜しました。しかし彼らがイエス様に求めていたのは、「パンのため」です。「なくなってしまう食べ物のため」です。彼らがイエス様に求めていたのは、「永遠のいのち」ではありません。彼らがイエス様に求めていたのは、「なくなってしまう食べ物」です。「永遠のいのち」ではなく、「この世のいのち」に必要なものです。食べ物が与えられるように、着る物が与えられるように、住む所が与えられるように、病気が治るように、人間関係がうまくいくように、家族が幸せに暮らせるように、そのようにこの世でできるだけ苦しみや悲しみが少なく、いわゆる幸せに暮らせるように、そのようなことをイエス様に期待していたのではないのでしょうか。

確かにイエス様は、「主の祈り」の中で、「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ」と食べ物のために祈るように教えています。その意味で、「この世のいのち」のために祈ることは、決して悪いことではありません。しかしイエス様は、「主の祈り」の中で、続けてこのように祈るように教えています。「我らに罪をおかす者を、我らがゆるすごとく、我らの罪をも赦したまえ」。イエス様は、私たちの罪の問題のためにも祈りなさいと言われます。「この世のいのち」のために祈ることも大切です。しかし、それだけでなく、「永遠のいのち」のために祈ることも大切なのではないのでしょうか。自分の罪のこと、霊的なこと、魂のこと、いつまでもなくなる、自分が死んだ後にも続いていく永遠のものを求めていくことが大切なのではないのでしょうか。私たちは、目の前のものに捕らわれて、近視眼的になりがちです。しかし、私たちは、いつまでもなくなるもの、永遠のものを求めていかなければならないのではないのでしょうか。

## 2. 信じるのではなく、何かをすべきと考える群衆

群衆は、イエス様に「なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい」と言われると、28節でこう言います。「**神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか**」。群衆は、「永遠のいのち」と聞くと、「何かをすべき」と考えました。ユダヤ人たちは、「永遠のいのち」を手に入れるためには、何かをしなければならないと考えたのです。ある金持ちの青年がイエス様のもとを訪ねて来た時も、こう言いました。「**先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか**」(マタイ 19:16)。ユダヤ人たちは、「永遠のいのち」を求めていました。しかしその「永遠のいのち」を手に入れるためには、何か良いことをしなければならない、つまり神様の律法を守らなければならないと考えていたのです。彼らは、良いことをすれば、神様の律法を守れば、「永遠のいのち」を手に入れることができると考えていたのです。しかも彼らが「神のわざ」という時、ギリシヤ語の原文では複数形で書かれています。つまり彼らは、「永遠のいのち」を手に入れるためには、沢山の良いことをしなければならない、いくつもの神様の律法を守らなければならないと考えていたのです。

ではそれに対して、イエス様は何と答えられるのでしょうか。29節でイエス様は、こう言われます。「**神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです**」。イエス様は、「永遠のいのち」を手に入れる方法は、一つしかないと言われます。イエス様は、「それが神のわざです」と言われましたが、ここでの「神のわざ」という時のギリシヤ語は単数形で書かれています。ユダヤ人たちは、「永遠のいのち」を手に入れるためには、沢山の良いこと、いくつもの神様の律法を守らなければならないと考えていました。しかしイエス様は、「永遠のいのち」を手に入れる方法は、一つしかない、それは「神が遣わした者をあなたがたが信じること」、つまりイエス様を信じることしかないと言われるのです。神様が私たちに求めておられるのは、沢山の良いことをすることでも、いくつもの神様の律法を守ることでもありません。神様が私たちに求めていることは、一つしかありません。それは、イエス様を信じることです。神様は、私たちに「永遠のいのち」を与えたいと願っておられます。そのために、イエス様のこの世に遣わし、イエス様は私たちに「永遠のいのち」を与えようとされています。すべて神様とイエス様が「永遠のいのち」を、私たちに用意してくださっているのです。私たちはただ、それを疑わずに、素直に信じれば良いのです。

イエス様はなぜ私たちに、「信じること」を求められるのでしょうか。私たちは、人から信じてもらうこと、信頼してもらうことは、嬉しいことです。逆に、疑われること、信頼してもらえないことは、悲しいことです。冤罪などは、最も悲しいことです。罪を犯してないにも関わらず、犯罪者として扱われる、どんなに証言しても信じてもらえない、親しい人まで自分を疑い、離れていく、それは最も悲しいことです。イエス様も、多くの人に信じてもらえないのです。二千年前には、神を冒瀆する罪に定められ、十字架で死刑にされたのです。イエス様は、どんなに自分は神様から遣わされた救い主である、神の子であると証言しても、信じてもらえなかったのです。「信じること」は、「愛すること」でも

あります。パウロは、I コリント 13 章で、「愛」について語っている所で、「愛は、・・・すべてを信じること」であると言っています（I コリント 13：7）。私たちは、イエス様のことばを信じているでしょうか。それとも疑っているでしょうか。イエス様は、ご自分が神様から遣わされた者である、私たちに「永遠のいのち」を与えるものであると語っておられます。もしそのことばを疑わず、真実だと信じ、イエス様に信頼するなら、「永遠のいのち」を手に入れることができるのです。「永遠のいのち」を手に入れる方法は、一つしかありません。聖書を全部読まなければならないとか、毎週礼拝に休まず出席しなければならないとか、奉仕を一生懸命しなければならないとか、献金を沢山しなければならないとか、聖書で書かれていることを全部守らなければならないとかではありません。それは私たちには不可能です。イエス様が私たちに求めていることは、ただ一つ、「わたしのことばを信じてほしい、わたしを信頼してほしい」ということだけです。イエス様を疑わずに信頼すること、それこそ、イエス様に対する愛の表現なのです。

### 3. しるしを求める群衆

しかし群衆は、30-31 節でイエス様にこう言うのです。「**それでは、私たちが見てあなたを信じられるように、どんなしるしを行われるのですか。何をしてくださいますか。私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『神は彼らに、食べ物として天からパンを与えられた』と書いてあるとおりです**」。群衆は、イエス様を信じられないのです。イエス様を信じるために、「奇跡を行ってください、モーセのように天からパンを降らせる奇跡を見せてください」と言うのです。群衆が求めているのは、やはり「パン」です。「永遠のいのち」ではなく、「この世のいのち」です。群衆は、「あなたが『この世のいのち』を満たしてくださるなら、あなたを信じます」と言うのです。「あなたが、食べる物、着る物、住む所、病気も人間関係も、仕事も家族も、全部私を幸せにしてくれたら、あなたを信じます」と言うのです。

しかし、モーセが荒野で天からマナを降らせたのも、イエス様がパンを増やして五千人以上の群衆を満腹にしたのも、すべてはイエス様こそ、私たちに「永遠のいのち」を与える方であることを証しする「しるし」であったのです。彼らには、十分に「しるし」が与えられていたのです。イエス様を信じる証拠は、十分に揃っていたのです。しかしそれでも彼らは、イエス様を疑い、なおも奇跡を求めたのです。結局のところ、彼らは、自分を幸せにしてくれなければ、イエス様を信じないということであったのです。祈りを聞いてくれなければイエス様を信じない、病気を治してくれなければイエス様を信じない、家族を幸せにしてくれなければイエス様を信じない、経済的に豊かにしてくれなければイエス様を信じない、目の前の問題を解決してくれなければイエス様を信じない、そういう姿勢であったのです。

私たちは、どれだけの証拠があれば、イエス様を信じることができるのでしょうか。イエス様は、聖書の中でご自身のことばを語っておられます。また旧約聖書も新約聖書もイエス様を証ししています。現代の私たちには、イエス様を信じる十分な証拠が揃っていま

す。あとは、私たちの決断だけです。イエス様を信じるか、疑うか、どちらかです。それによって、私たちに「永遠のいのち」が与えられるかどうか、懸かっています。

## **おわりに**

ある説教者が、今日の聖書箇所の説教の中で、星野富弘さんの有名な詩を引用していました。星野富弘さんは、中学校の教師でしたが、部活動の指導中に事故に遭い、首から下が動かなくなりました。その後、クリスチャンになり、口で筆をくわえて文字や絵を描く「詩画」を創作するようになりました。長年、多くの作品を描き、今年の4月に78歳で天に召されました。星野富弘さんの有名な詩に、次のようなものがあります。

いのちが一番大切だと思っていたころ、生きるのが苦しかった。

いのちより大切なものがあると知った日、生きているのがうれしかった。

星野富弘さんは、事故で体の自由が奪われて、「いのちが一番大切だと思っていたころ」は、「生きるのが苦しかった」のだと思います。なぜこんな事故にあったのか、これからどう生きるのか、そういうことばかり考えていたと思います。しかしある時、「いのちより大切なものがあると知った」のです。その時に、苦しみから解放されて、喜びに満たされたのです。

私たちも「この世のいのち」のことばかり考えていると、生きるのが苦しくなるのではないのでしょうか。この世でいかに幸せに生きるかということばかり考えていると、生きるのが苦しくなるのではないのでしょうか。「この世のいのち」よりも、もっと大切なものがある、「永遠のいのち」がある、死を越えていつまでもなくなるいいのちがある、神様とイエス様と永遠に共に生きるいのちがある、そのことを信じていく時、私たちも星野富弘さんと同じように、うれしくなるのではないのでしょうか。

イエス様は私たちに、いつまでもなくなるものを与えてくださる方なのです。そのことを疑わずに、信じてみませんか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、「この世のいのち」のことばかり考えて生きています。目の前の問題が解決することばかり考えて、「永遠のいのち」のことを考えません。イエス様に対しても、「この世のいのち」のことばかり求めています。しかし「この世のいのち」のことばかり考えている時、私たちの心には平安はありません。苦しみや悲しみが絶えず付きまといます。どうか私たちが、いつまでもなくなるものを求めることができますように。それを私たちに与えようとしておられるイエス様を、決して疑わず、信じることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。